



擁
去
海
萃

三

15
55
3



明僧5
辨 55
卷 3



擁書漫筆卷第三

目錄

- 一 路傍の並木
- 白川の関圖
- 一里塚
- 二 杉田八月の名死毛梅
- 三 やまらん鳥
- くまのけ
- 鶯の名義
- 郭公の名義
- 四 葛西筑前群芳曆の序

擁書漫筆三

○ 目錄一

○ 淺草並木の櫻

○ 雁の名義
○ 鳥の名義



五 井野石齋の歌并盆庭の風流

六 藤原字万伎の歌

○静舎集

七 中井敬義の書世よすらぬ

○岐岨日記
話并詩

八 片岡寛光の歌

九 余の松屋とも擁書倉とも魂

一話

○横田袋翁の歌

○藤原正且の歌

○村田るせ子の歌

○正木千幹の歌

○小谷鳩谷の歌

○大田南畝の詩

○大窪行の詩

○菊池桐孫の詩

十 小月らぎの盃

○游女黒漆の盃を用
○合巻

十一 北川真顔の歌并發句

十二 小谷鳩谷のものかよれる孝順義節の者

十三 おやど人の談よ弃子を拾育一者

十四 磐瀬醒の古机の記并歌

十五 妻をぶすといふ事

○ぶし矢
○とくまの矢

十六 お月や河原の伊波為都良

○毒箭はあもれを治方
○武蔵國大家の郷
○比と為と音の通

十七 正月の餅を酒樽よ納事

○紅梅桃花など保事

○茄子を保事

○櫻實をとりてん何なりし事

○酒は諸白とりし事

○櫻花櫻實を保事

○種々の物を保事

⑥ 新韻集のそと

⑤ 因幡堂薬師縁起画詞のそと

④ 石燈爐の古物くまぐく并圖

③ 齋藤彦麻呂の歌

② 吏部と李部ハ通りが例

① かせぐとりし俗語

○持の字義

○かせ木

○鹿をかせぐとりし事

○鹿仗の圖くまぐく

○可洪音義のそと

④ 水鳥記のそと

○千住酒戦記の大意

○酒戦の圖

○平秩東作の傳

○龜田鵬齋の詩

○大田蜀山の狂歌

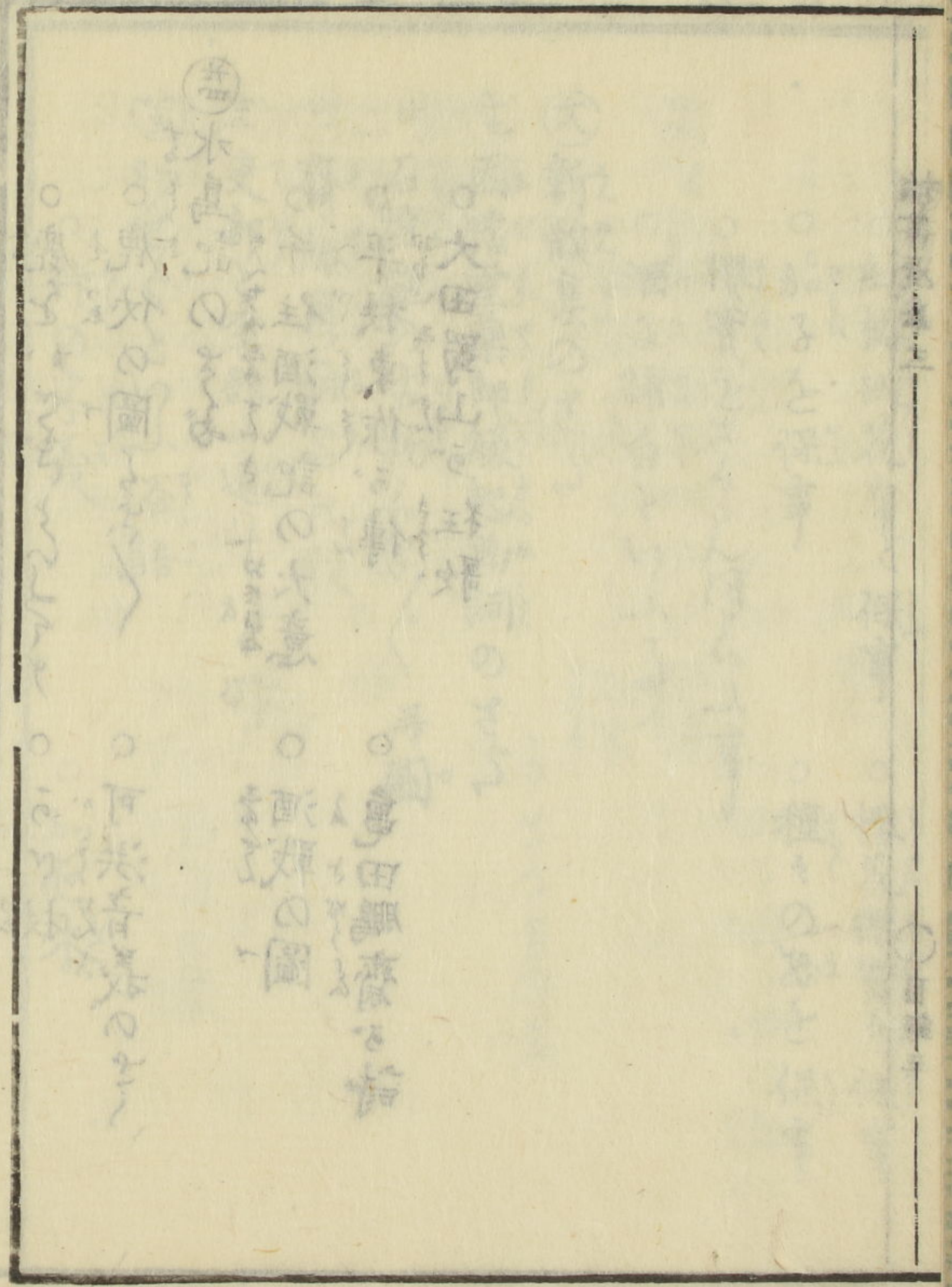
権書漫筆卷第三

高田與清文儒

類聚三代格七の卷。天平寶字三年六月廿二日官符。應
 畿内七道諸國驛路兩邊遍種菓樹。右東大寺普照法師
 奏狀。備道路百姓來去不絕。樹在其傍。足息疲乏。夏則就蔭
 避熱。飢則摘子噉之。伏願城外道路兩邊栽種菓子樹木者。
 奉勅。依奏。延喜式五十の卷。雜式。凡諸國驛路邊植菓樹。
 令往還人得休息。若無水處。量便掘井。東關紀行。子古武藏
 前司。乃のゆるりの筆。よおちやうて植ぬるる柳也。
 いまの世は、陰謀の心まをばはかしくせむ。かのくまづるの
 こころを、ゆるりあはれなり。廻國雜記。白河二死の圖。

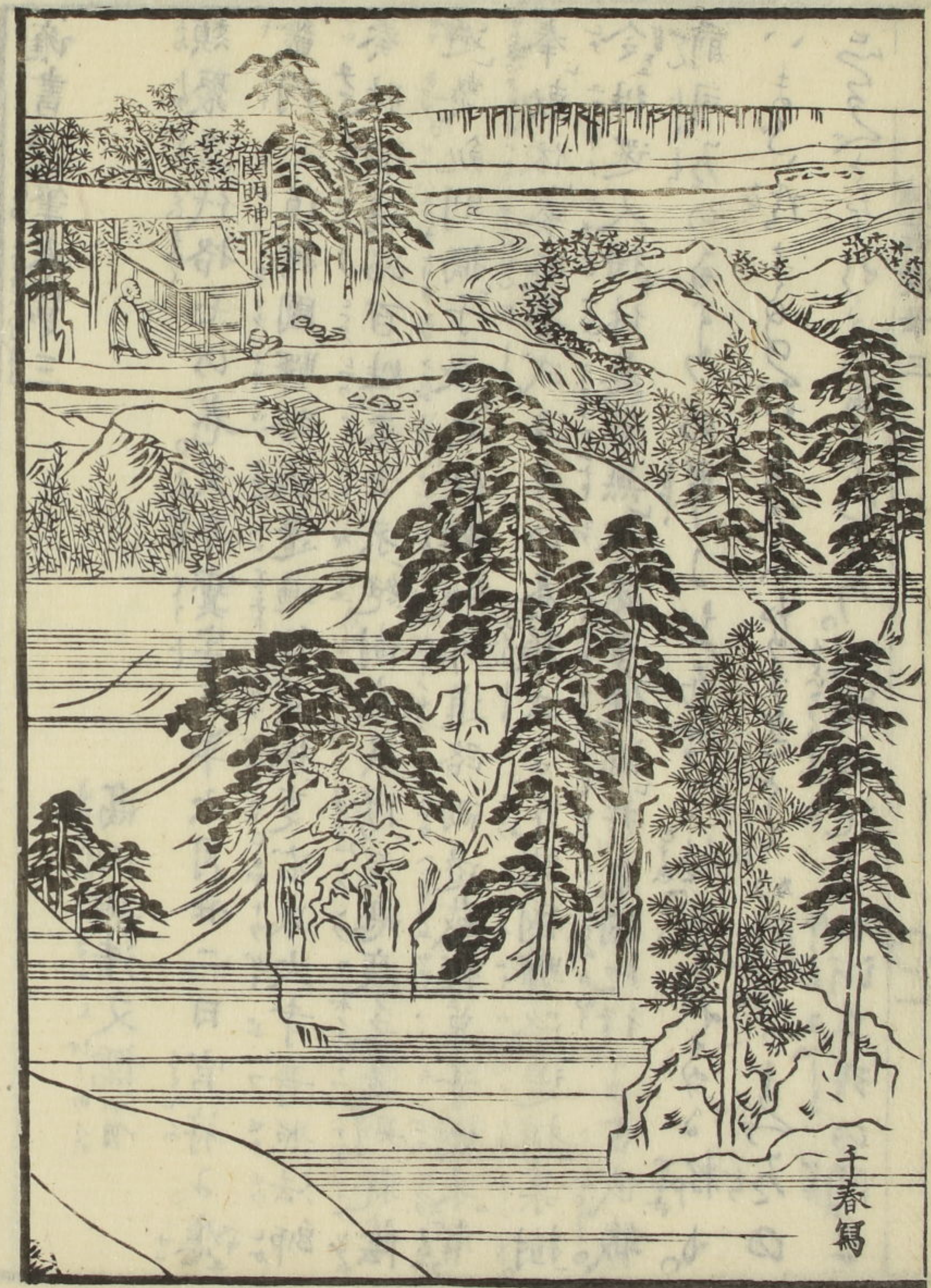
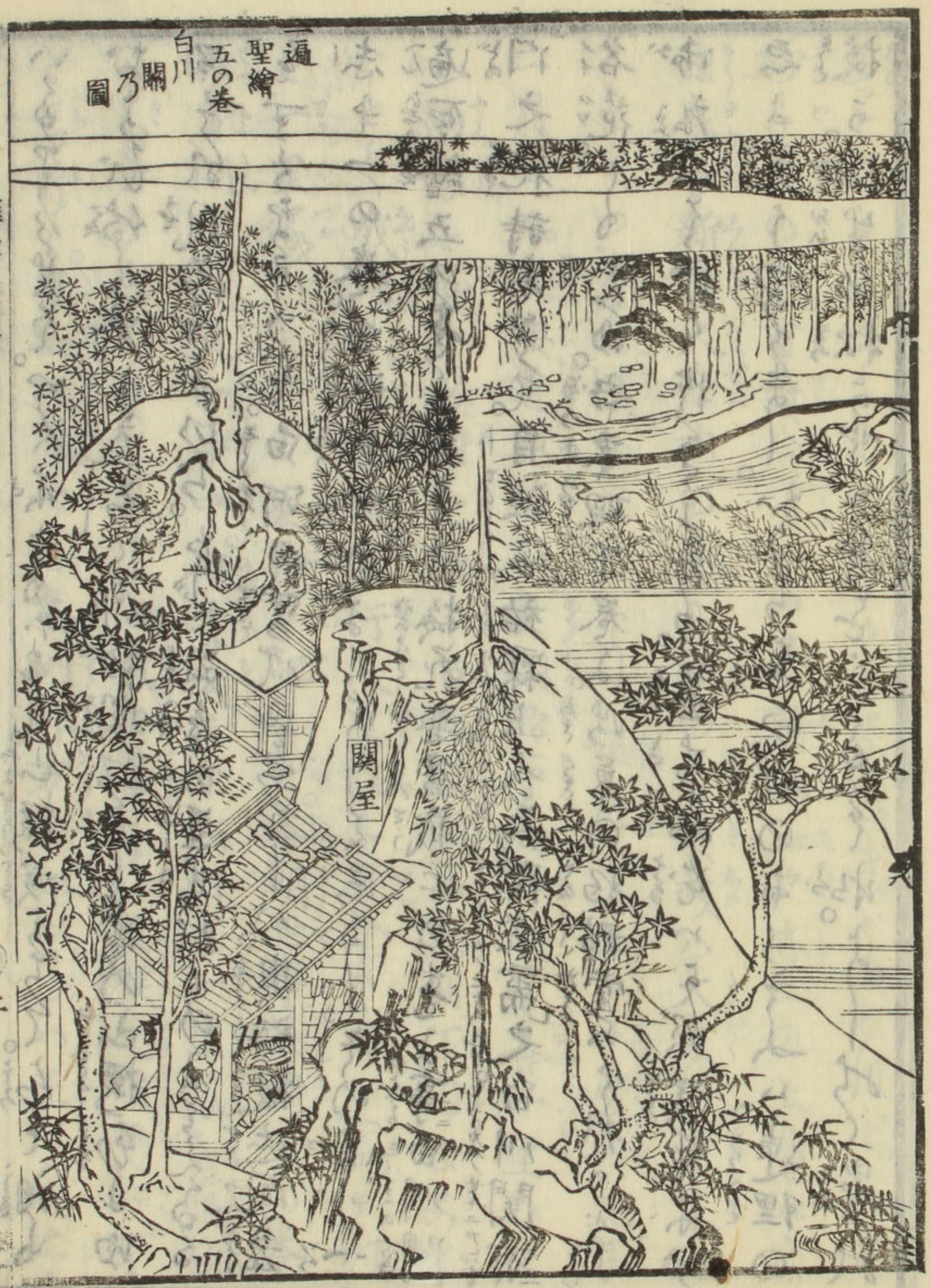
権書漫筆三

〇一



一通 聖繪 五の巻 白川 關乃圖

權書漫筆三



子春寫

いふやうな事をいふ本もあつた。山標をいふて。いふやうな
および傳へず。まゝ「志」の関をいふて。山標をいふて
る。これ風のよむら。など。路邊の並木れりのよむら
をすくはる。白河の雪れゆき。奥羽報遠聞左
志十一の巻。白河郡の部。梅花無盡蔵二の巻。奇白川関
遍繪五の巻。載り。梅花無盡蔵二の巻。奇白川関
門之花詩あつて。自注。祐霖上人為関老需之白川関有
名花。も。あつて。妻廻下巻。此草の形堂。これらよ。
市。いふやうな。いふやうな。いふやうな。いふやうな。
志。いふやうな。いふやうな。いふやうな。いふやうな。
枝。いふやうな。いふやうな。いふやうな。いふやうな。

いふやうな事をいふ本もあつた。山標をいふて。いふやうな
および傳へず。まゝ「志」の関をいふて。山標をいふて
る。これ風のよむら。など。路邊の並木れりのよむら
をすくはる。白河の雪れゆき。奥羽報遠聞左
志十一の巻。白河郡の部。梅花無盡蔵二の巻。奇白川関
遍繪五の巻。載り。梅花無盡蔵二の巻。奇白川関
門之花詩あつて。自注。祐霖上人為関老需之白川関有
名花。も。あつて。妻廻下巻。此草の形堂。これらよ。
市。いふやうな。いふやうな。いふやうな。いふやうな。
志。いふやうな。いふやうな。いふやうな。いふやうな。
枝。いふやうな。いふやうな。いふやうな。いふやうな。

権書漫筆三

〇三

揚柳深處揭帝賣酒唯欲使客跡不斷而意味厭更植夏秋
雜草野花屋中又益累積農經花史稍々咨詢之有識喋々
為來客辨證唯欲不使一日無花一日無客而意味厭更著
秋野七草考刻板發兌游揚之四方數年之後士女來觀百
千成羣果不讓木母海晏日暮飛鳥龜井巢鴨之繁華今又
著春野七草考係昔年所著秋草考行之更名曰群芳曆意
不獨止此春秋二考凡園中所有毛詩楚辭漢魏六朝唐宋
詩賦乃至萬葉古今集所吟咏衆多花卉藥品行將逐一加
考證行之又遍請序於一時名士文人唯恐遺一人因是道
入序之曰一年七十二候三春廿四番老人不欲遺一花半
草名以曆字洵有以矣抑吾又有一說曰曆係算數老人初

植梅時心中暗算道此一著俺家老小可以無饑也又植花
草時暗算道此一著俺家老小可以免寒也又著春秋二考
時暗算道此一著可以葺屋可以當身衣飯有餘可以施及
子孫老人少壯向市井場中爭逐錐末未嘗落後老人之舉
動悉皆自買賣算盤珠上來者歟老人間常虔祈天滿宮遂
愛梅而植梅意不在愛梅在延客不在延客在索錢上自列
侯大夫妃嬪命婦下至士庶奴隸來觀花者隨分留賞錢老
人滿面堆笑春風披拂儻有不留賞錢者老人滿臉鬼胎秋
氣冷淒一日之內霎時之間胸中氣候乃再余慰之曰老人
之園今興旺然足以終餘年又規之曰花之曆數在汝躬惟
廉惟貪允執厥中是為群芳曆序也

礼記註疏六十一の卷昏禮第四十四の共牢
 而食合登而醕所以合體同尊卑以親之也註云登徐音謹
 破瓢為危也說文作登云蠱也字林几敏反以此登為警身
 有所承疏云合登而醕者醕者寅也謂食畢飲酒演安其氣
 登謂半瓢以一瓢分為兩瓢謂之登塔之與婦各執一片以
 醕故云合登而醕儀禮註疏二の卷士昏禮第二の四爵合
 登註云合登破匏也四爵兩登凡六をよとあるをゆひ
 唐様を片多て中国より習禮ハ鳥漆の合
 登を用しおのづから遊女の登りもうつり
 小川真顔ハ江戸數寄屋河岸よすなり。もど免落書躰
 の狂歌をりてその名もさうきさうきハ長ハ風舟を

変て美系古今の俳諧歌をよせり。類題俳諧歌集六卷
 を何れも世人のまれをひりし和唐の詩より
 て。文よりこぎりぬかり。魏をばね堂四方歌垣俳諧歌場な
 びつり家業七巻瀧萩茶とちづく。軸金玉聲あり
 余の擁書金よてうたるるる
 月空のありがどむんぬむのふづき
 ま俳諧歌論をよめる時の祭句とて
 芭蕉やぶる神やうけり反流波
 小谷鳩谷のものかめり。孝子順孫義夫節婦の名を
 こゝろに下総國猿鳴郡将石村の政を備の書より
 同郡我持村のる七回周能子より二里あまゆふりける

コト如く毒ハエグリテ薬ヲ付ル云云本草綱目十
七の下巻鳥頭の条は草鳥頭取汁晒為毒藥射禽獸故有
射罔之稱後魏書言遼東塞外秋收鳥頭為毒藥射禽獸陳
藏器所引續漢五行志言西國生獨白草煎為藥敷箭射人
即死者皆此鳥頭云云本草和名十の卷草下射罔の条は
陶景注云以八月取汁日煎為射罔獨師以傳箭射穴中人
亦死云云倭漢三才圖會十三の卷異國人物蝦夷の条は
負劍於背挾弓於脇獨鳥獸其射不敢致遠惟二三丈之中
正靜分厘而必不差又製草鳥頭毒塗鏃射人如中則肌膚
腐爛死急剥去所中身皮生蒜研末傳之乃無害也
るを考てそのゆえよりあるをいふとくきの矢ハ左京太

支頭輔集「あまき」のえそのはくするわるとくま
の矢こそひまはあわれとくするを頭取を羽芝の矢と
解しハいりしやあはゆる三才圖會草木圖四の卷本草
綱目圖上巻毒草類の部證類本草十の卷草部下品の条
倭漢三才圖會九十五の卷毒草類の部わづらの圖を足
ばその草の類の鳥は似るしあれハやがて鳥莖とい
いつるや漢字は鳥頭といふ俗語は鳥はつとつと
共々もよみゆるのなを大和本草や本草
啓蒙よトキノ矢とあるハいふごとくや蝦夷人の
弓射くことハ景行紀廿八年の条は東夷之中蝦夷是充
強焉云云以箭藏頭髻刀佩衣中唐書百廿の卷東夷列傳

第一百四十五天智立明年使者與蝦夷人偕朝蝦夷亦
居海島中其使者鬚長四尺計珥箭於首令人戴瓠立數十
步射無不中社祐通典百八十五の卷東夷上。蝦夷國海
島中小國也其使鬚長四尺充善弓矢挿箭於首令人戴瓠
而立四十步射之無不中太平御覽七百八十二の卷四夷
部三。唐書曰蝦夷國海島中小國也其使鬚長四尺充善
弓矢挿箭於首令人戴瓠而立數十步射之无不中者など
この外ものよおやくとせり。ちぢまきり。武備志百四
十三の卷。治中毒箭者方あり。箚根一兩。藍葉一兩。紫檀
五錢。石灰二兩。研作末。以右為末不拘時候以藍葉汁調下
一錢粥飲下亦可云云。此外も金瘡中毒溺死壓死火傷

(六)

馬傷などの治方あまのあせば。関てある。巻一。
萬葉集十四の卷武藏國相聞歌。伊利麻治能於保屋我
波良能伊波為都良比可婆奴流奴流和爾奈多要曾祿也
よゑる於保屋我波良ハ和名抄國郡部。武藏國入間郡
の郷名大家於保也介とあるを武藏演露入間郡部。今
此大在家村。その郷名の跡をみる。万葉のあせば。河
系ハ保屋と云ふ。と云ふ。武藏演露。入間郡の村名大
谷大谷木。とある。共々音のよき。いつくも。定む。
とけき。武藏國と云ふ。大谷木ハ河邊の里なり。ねば
らき。ハあせと。いと。あせ。萬葉集十四の卷上。國お
聞歌。ハ。保屋の。保屋。伊波為都良比可婆奴流

擁書漫筆三

○廿

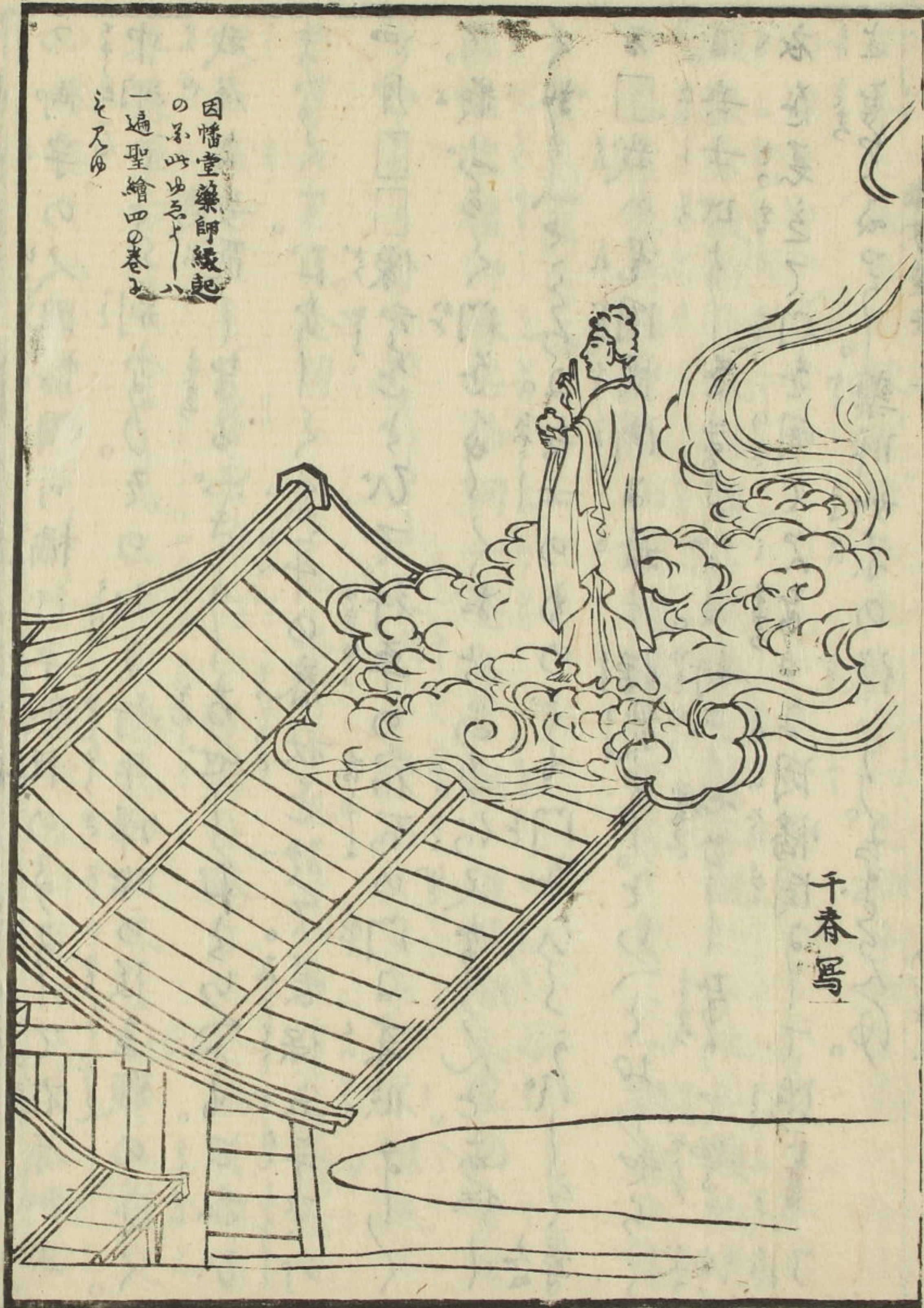
百年之舊物無疑也。恐平他字類抄之祖乎。世之萬里居士の作とりへど。そをききし。あるまじくといわれり。出は類聚名義抄。童蒙誦韻字鏡集。色葉字類抄。平他字類抄。運歩色葉集。節用集。倭玉篇。撮壞集。など。な。一稱。必。き。書。よ。を。あ。つ。と。る。

因幡堂藥師縁起画詞一卷あり。詞ハ後醍醐天皇の由せ。あつる。あ。う。と。い。は。し。く。天。明。年。中。の。火。は。あ。ひ。て。縹。紙。を。や。け。ぬ。き。と。全。體。ハ。こ。と。ゆ。き。た。り。画。も。河。也。と。い。ふ。考。古。の。便。に。備。づ。き。こ。と。多。なり。好。古。小。録。上。卷。に。三。卷。画。光。信。書。尊。應。准。后。と。り。る。よ。い。山。城。名。勝。志。四。の。卷。に。引。と。る。漢。文。の。縁。起。よ。い。お。な。い。う。い。は。縁。起。は。行。平。と。あ。る。ハ。一。條。院。

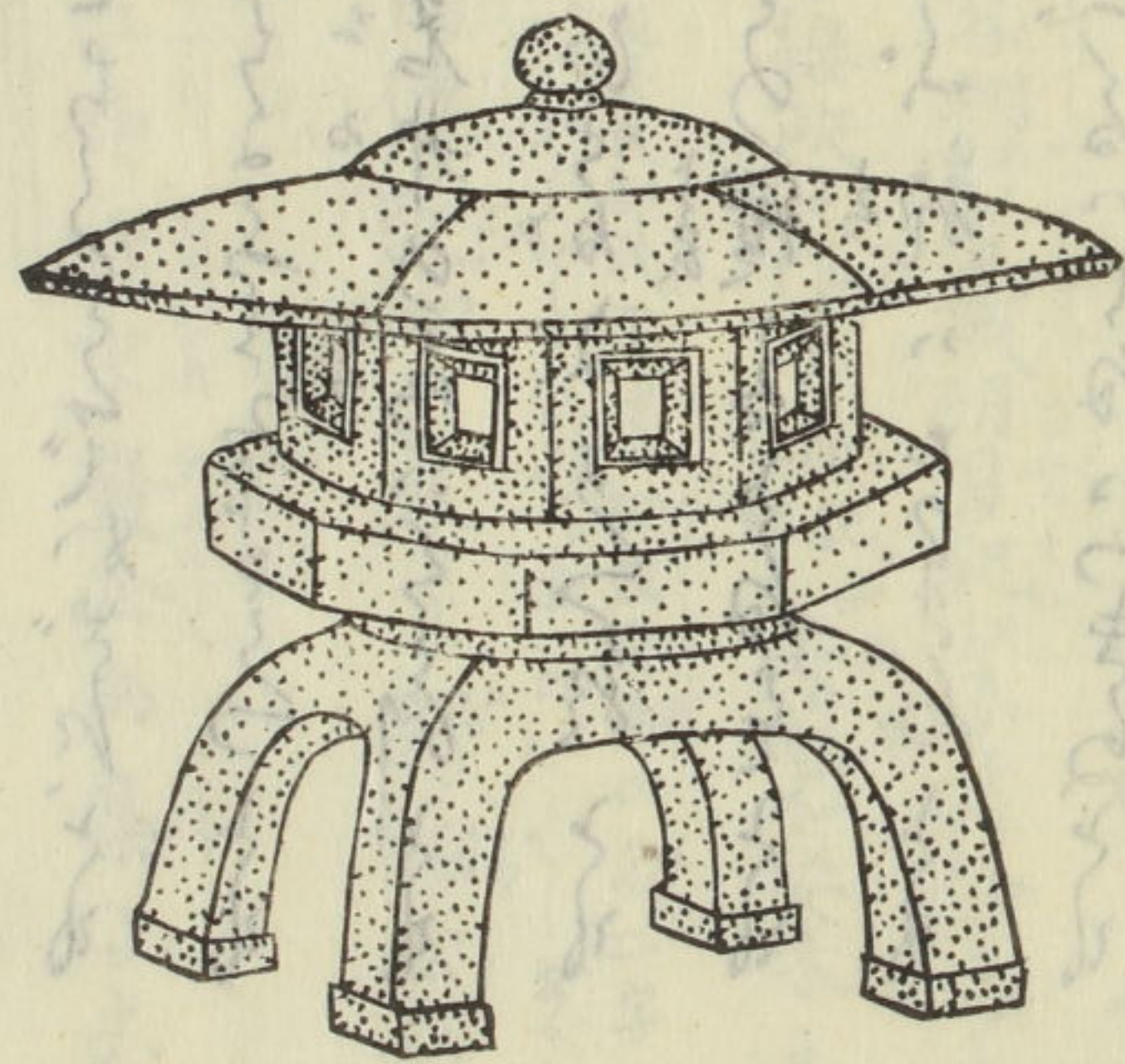
の御宇の人因幡國司橘行平朝臣のりりて。在原行平中納言と別なり。その初は行平帰洛の後立願のごとく。我屋に安置し置る。づきより。な。ぜ。と。い。は。れ。ぬ。公。私。ひ。ま。わ。り。て。む。な。し。く。毎。年。の。春。秋。を。終。て。長。保。五。年。癸。卯。四。月。□。□。像。を。と。び。て。行。平。の。宿。所。の。門。に。來。臨。ま。し。く。て。我。が。く。門。を。ぬ。く。お。と。あり。何。人。な。ら。ん。と。あ。や。し。く。お。り。し。と。ら。る。よ。士。の。もの。ども。門。を。ひ。ら。く。と。尋。る。□。我。ハ。是。因。幡。國。に。居。し。借。來。よ。し。と。い。は。れ。お。り。せ。ら。る。よ。兵。士。び。よ。を。ま。り。す。よ。行。平。思。出。し。な。り。て。經。て。淨。衣。を。着。て。門。を。開。て。又。ま。り。よ。因。幡。國。に。て。は。よ。り。引。と。な。す。と。い。ふ。藥。師。如。來。の。像。なり。ち。ま。ら。ん。ゆ。



因幡堂藥師縁起
 の事此巻より一
 遍聖繪四の巻に
 と又也

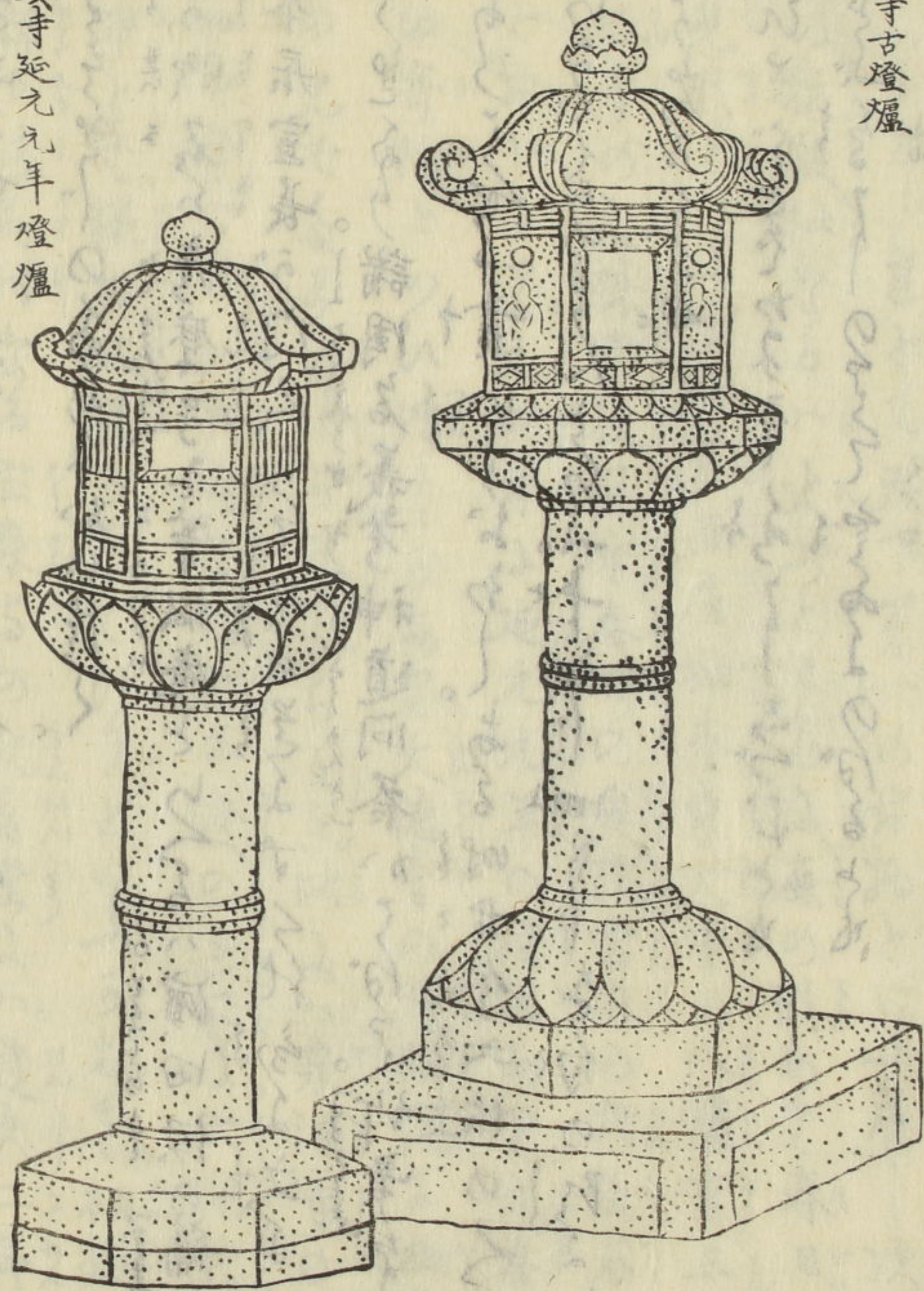


泉涌寺
雪見形燈燵



千春寫

橘寺古燈燵

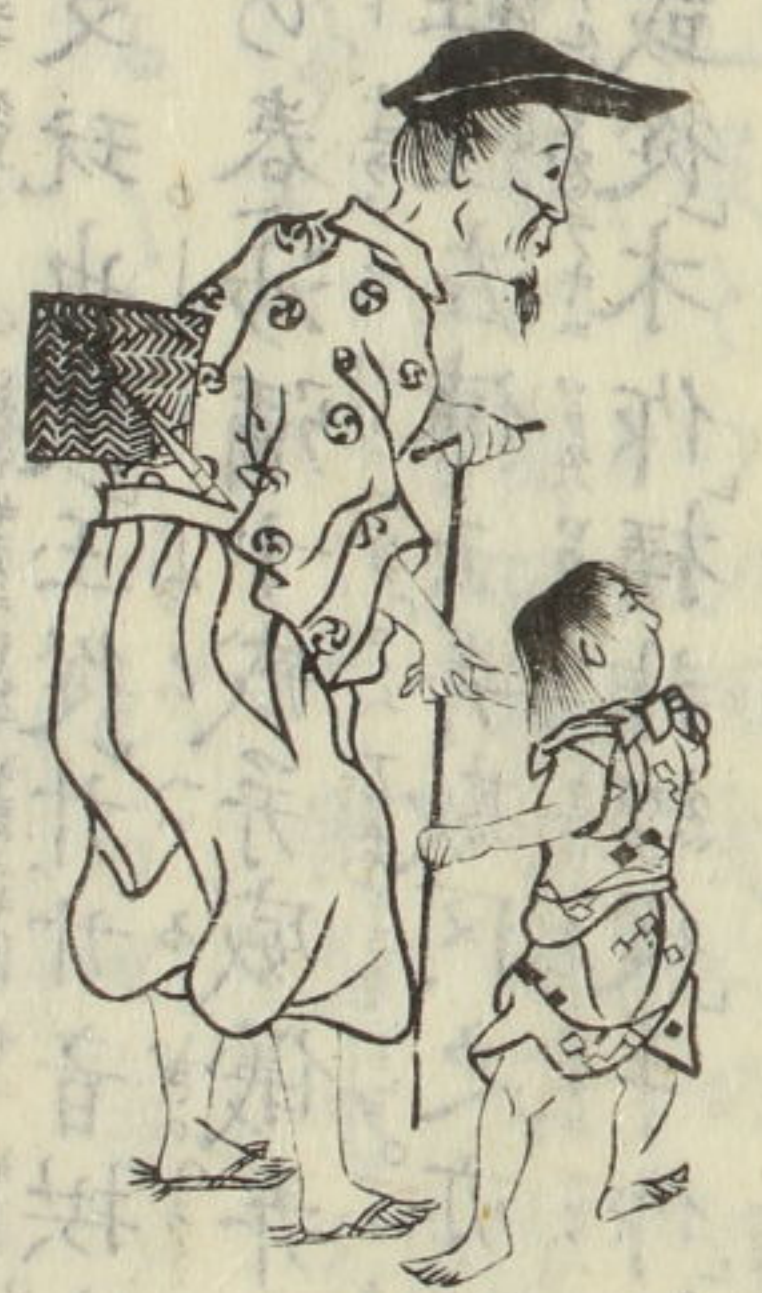


元興寺延元元年燈燵

かぞ杖の巻は志貴山藤
起の画巻七十一番職人歌
合あはれの巻まきの巻まきの巻まき
足あしの巻まきの巻まきの巻まき
かぞ杖の巻は志貴山藤
起の画巻七十一番職人歌
合あはれの巻まきの巻まきの巻まき
足あしの巻まきの巻まきの巻まき

天永賀茂祭画巻也上人の鹿杖
の巻まきの巻まきの巻まきの巻まき

天永賀茂祭画巻也上人の鹿杖
の巻まきの巻まきの巻まきの巻まき



持善漫筆

〇廿九

千春實

仲大納言画巻。杖の圖。
此ハ梅窓筆記也或
京雙五法前院野藏。
融通念伴縁起画巻。
鹿杖の圖。

天永賀茂祭画巻。杖及龍の圖。
此ハ梅窓筆記也或



今著園集廿の卷會獸虫部或曰山とすけるよ大猿
るるきく本追のゆで射ゆるるよかせきる居て
り。すでよ本よりおちんとゆるるよ何とゆるんぬと
本のまじりおくやうゆるるよ本の候とかせき
とゆるく蛙あ。二皮以白布十字緘之院中儀持ニ持
テ持之忠高卿記。延應元年六月四日拜賀仕丁二人著
白張一人持笠一人持雨皮持ニ貫テ持之永仁六年八月
五日新院御幸始記云仕丁一人持雨皮懸持栗黄記云寛
元四年三月二日院御幸雨皮張筵料持連歌新式増抄
上巻。鹿らせぎハ角のうせ本をどしゆるるやうなる
云んく。ちどんを考合でてゆるるべしといしきり

今撰。梅窓筆記下巻。平家物語三の卷大塔建立の條
ものぶみんのまきまの。
伴大納言画卷ちど引て。ゆるるまきまのうせ杖の圖を出
でり。まき古画。鹿角を杖頭よせおしり。和名抄
僧坊具部。漢語鈔鹿杖加勢。都惠行旅具部。機首。汰の條
。一云鹿杖など。んえゆるるよありとつ。ゆるるよ
引る新集藏經音義隨函録。五代石晋の沙門可洪が撰
りて。卅冊あり。今ハゆるるよゆるるよゆるるよ
書ゆるるよゆるるよゆるるよゆるるよゆるるよ
ゆるるよゆるるよ
輪池翁のもゆるるよ水鳥記の画卷ハゆるるよ刊本と
異なる。おしり画もゆるるよゆるるよゆるるよゆるるよゆるるよ
序跋用

録ハ省てゐる。巻首に草紙ハ兼應のころ。武
列大塚はすゑる。醫所地蔵坊指次とある。名は
て。晋の劉伶唐の李白も。をさく。芳々酒香ありと
地黄元の性酒をこめとてあう。まぬ鉄を忌ゆ。意
破てし。うもい。うらぬ。意より。自かく。名の
底深とて。是れい。う。きと。戸あ。り。指次は。通。つ。い。つ
と。上。戸の。け。か。を。分。人。と。考。え。ら。し。う。り。し。あ。る。時。辰。の
ある。う。あ。り。て。樽。次。同。志。の。友。を。い。や。ま。り。大。師。河。原。行
春。の。園。の。桃李。も。る。う。が。是。秋。の。み。ま。れ。林。の。遊。り。と。増
を。綴。り。水。多。記。と。名。づ。く。る。あ。ら。し。し。酒。と。り。の。字。も。つ。き。て

い。ゆる。なる。べ。ー。と。ん。ゆ。地。黄。坊。指。次。の。自。作。一。本。の。酒
戦。談。と。題。号。せ。し。ゆ。あり。流。布。の。刊。本。二。種。あり。て。奥。書。に
寛。文。七。年。五。月。吉。日。寺。町。二。条。下。町。中。村。五。兵。衛。開。板。と。志
る。也。上。下。二。卷。之。三。月。吉。日。松。會。開。板。と。ある。ハ。上。中
下。三。卷。の。こ。ろ。あり。て。樽。次。を。指。す。ゆ。え。に。ハ。江。戸。總。鹿。子
新。増。大。全。二。の。卷。谷。中。天。台。宗。寺。院。の。部。同。書。二。の。下。卷。小
石。川。禪。宗。の。部。續。江。戸。砂。子。三。の。卷。近。世。奇。跡。考。五。の。卷。直
春。夜。話。地。黄。坊。事。跡。考。武。載。演。露。橋。樹。郡。の。部。調。布。日。記。下
卷。な。ら。ば。出。る。れ。ば。因。り。名。の。文。化。十。二。年。十
月。廿。一。日。千。住。宿。壹。丁。目。に。す。ゑ。る。中。屋。六。右。衛。門。の。家。に
て。六。十。の。年。賀。の。酒。の。吞。ら。く。べ。で。て。その。酒。戦。記。二。卷。画



千春画



一鋪あり。今要を撫て記す。

伊勢屋言慶 新吉原中町合余を飲

大坂屋長兵衛 馬喰町合余を飲

市兵衛 香ヶ丘住けり宿を無量杯ハ壹升五合

松勘 錦倉杯九合盛江島杯壹升五合

佐兵衛 下野合小山人七升

大野屋茂兵衛 新吉原中町大野屋無量杯

藏前正太 浅草御左官也三升

石屋市兵衛 万壽無量杯宿の人飲也

大門長次 新吉原を三味線水壺子醬油一升也

茂三 馬喰町人也三十四計小蓋

新屋与兵衛 千住掃部宿の人也三十四計小蓋

天満屋五郎左衛門 千住掃部宿の人

おいく 酌取の女也江のぬ

おぬん 酌取の女也

天満屋よ女 天満屋五郎左衛門の妻也

菊屋おすい 千住の人也

おきく 千住の人也

料理人太助。終日茶碗をふるふゆけぬ。
會津の旅人河田。江志より始て。録毛電よいのるまで。
五杯と飲片く。丹頂鴉を砂。

龜田鵬齋谷寫山。ちどげあひらうよ招ききて。ゆめ尺でし

とを。そのそり千住掃部宿の八兵衛とりけるものハ壹分
饅頭九十九とつやいへて。出の酒戦記ハ平秩東作三

去つ免ふりし。平秩東作ハ立松博之字を子玉世称を
稻毛屋金石衛門とらひて。内藤新右の煙草屋之狂歌ハ

名あつて。万載集をよむよあおやくハもうばくハきでよ
身まうりて年一ゆき。今の東作をその名を襲ふちある

を。鴨齋の詩并序あり。千壽中六今茲年六十自啓初

度之筵大會都下飲士皆一時海龍也各一飲一斗或有頗

四五斗者可謂太平之盛事矣古人以醉人為太平之瑞宜

哉余在其座而親觀之時文化十二年乙亥冬十月廿一日

也。海龍群飲似爭珠雙手擊案傾五湖不覺伯倫七賢但定

應李白八仙徒大田蜀山が狂歌あり。詞書よ。かの地黄坊

樽次や池上河が。と酒のあひひせハ慶安二年の
ことよなん。ふとハ千壽のわりの中六や。六十の
賀よ酒戦をもよぬき。とまきて

語よよやく。作はよむなる

中たの會日の...
The text in this block is a dense column of handwritten Japanese characters, likely a list or a detailed record. It includes various names and dates, such as '大田' (Ota) and '大田' (Ota), and mentions of '大田' (Ota) and '大田' (Ota). The writing is in a cursive style, typical of historical documents.

擁書漫筆卷第三終



